

新三河タイムス

2022年(令和4年)11月25日 金曜日

発行所
新三河タイムス社

第4951号

〒471-0025

豊田市西町4丁目26の3

☎(0565)32-1443(代)

FAX(0565)33-8002

http://www.shinmikawa.co.jp/



中部地区初級上級教習コース
スカイコース

豊田自動車学校 TEL 0565-28-1000
〒471-0828 豊田市前山町1丁目26番地

日本の原風景で米づくり

「羽布の里・自給家族」波及第1号に



豊かな田園風景が広がるなか、「自給家族で持続可能な農業を目指したい」と話す木下さん(左から4人目)＝豊田・羽布町で

減農薬で作る「幻の米 ミネアサヒ」を豊田市旭地区の生産者が都会の人に「家族」になってもらい、米作りを通じて一緒にふるさとの風景を守る「自給家族」の取り組みが、下山地区で「羽布の里・自給家族」として来年1月から始まる。手始めに、消費者の手元に届ける米の鮮度を保つため、大型保冷庫整備のクラウドファンディングに乗り出した。自給家族は旭地区の押井営農組合＝鈴木辰吉組合長(69)＝が中山間地の耕作放棄地を守るため、2020年から始めた。波及するのは羽布町が第1号。旭地区ではほかに2カ所の集落で意欲を示しており、高齢化で活力が失われかねない中山間地に都市住民が「関係人口」として参加する切り札として注目されている。

「若手でも自活できる」

木下さん 専業5年

「都市部の人と田舎のぼくらが、顔の見える関係で農業を支え合う自給家族に共感した。羽布町でもできれば、若手が中山間地で自活できる」。

5年前に専業農家になった木下貴晴さん(48)＝羽布町＝は意欲を示す。高校卒業後、サラリーマン生活を経て森林組合で働いた。家は元々兼業農家。厳しさは知っていたが「農業もあきらまないと考え直し1年間、市内



羽布の里・自給家族を応援する押井営農組合の鈴木組合長＝押井町の大型保冷庫で

【柴田永治】



の農園で有機栽培を学び5反の畑を借りて野菜セットの宅配を始めた。米作りで自活できるとは思えず、自給用に1反だけ作付けした。だが始めてみると、近所の人から次々に耕作を頼まれた。

ちょうど押井町の自給家族が軌道に乗ったところで、いまでは申し込みが100件を超えた鈴木さんに「羽布でもできないか」と相談すると押井では受け切れない分を若手農家ら5人で作る羽布みのり会で「羽布の里・自給家族」として受けることになった。

自給家族は日照不足など条件が不利な耕作放棄地を守るために発案された。農業などの使用を基準の半分以下に抑えた特

別栽培米で、その分、手間ひまがかかるため、通常の約1・5倍の1俵3万円です。買ってもらおう。だが、単に米の売買が目的ではないという。

「都会の人は単に美味しくて安心な米が欲しいだけでなく、豊かな田園風景が残る田舎に大手を振って遊びにいける関係性を求めている。そういう意味では自給家族は地

保冷库整備クラファン中

羽布町は人口1500人50世帯。新城と市境を接する豊田市最東端にあって、豊かな田園風景と入母屋造りの家屋が点在する。だが過疎・高齢化が進み、10年後には高齢化率が50%に達する見込み。木下さんはまちと田舎をつなぐ新しい取り組みにも熱心で、市内の部品メーカーと協力して工場

で3日、農地で2日働く「半農半X」という働き方も来年1月からスタートさせる。米作りしているのは現在2町歩だが、あと数年するとさらに数町歩の耕作を頼まれることになるという。

「耕作は70歳ぐらいま

元との付き合いそのものが肝」と鈴木さんは話す。そのため、毎年8月の「天王祭&サマーフェスタ」や11月の普賢院もみじまつりに来てもらい、田植えや草取りなども手伝ってもらおう。決してお客さん扱いせず、農作業と一緒に「家族」として参加するという。旭地区では伊熊町の後藤京一さん(72)や太田

町の高山治朗さん(70)も意欲を示す。後藤さんは今年2反で自然栽培米を作った。「いつでもウエルカム。農薬をほとんど使わない野菜もあり、押井のように応募してくれる人がいればいつでもスタートできる」と話す。高山さんも「自給家族にはロマンがある」と、まずは個人として押井農組合に参加したいと話す。

でならできると、80歳を超えると体力的に限界。どういう方法なら持続可能な農業ができるか、組織作りも含めて学んできた」と話す。羽布の里・自給家族は年明け1月から募集を始め、23年度は50家族を募る。シイタケ原木栽培や

炭焼き体験なども楽しめそうだ。一方、クラウドファンディングは144俵分の玄米を14度で保つ保冷库(約122万円)を整備する。お米を玄米のまま低温保存すれば酸化せず、いつでもおいしく食べられるという。

目標金額は250万円。期限は12月10日まで。参加者には3000円から5万円まで11コースが用意され、ミネアサヒ20ギヤや地元の隠れ家カフェランチ、自給家族申込優先チケットなどさまざまなリターンがある。鈴木さんは「中山間地で持続的な農業を維持できるかは全国どこも共通する悩み。これまで十数件の視察があり、11月以降も鳥取・日南町や北海道富良野市、埼玉・川越市など全国から視察があるが、実際にスタートするのは今回が初めて」と羽布町の取り組みを歓迎している。問い合わせは木下さん ☎090-1099-5158

クラウドファンディングのQRコード



クラウドファンディングのQRコード